

氏 名	マチノミサキ 町 野 三佐紀
学 位 の 種 類	博 士 （美 術）
学 位 記 番 号	博 美 第 247 号
学位授与年月日	平 成 21 年 3 月 25 日
学位論文等題目	〈作品〉澱み・海に吞まれる・とまどい・海の膜・静けさと低いささやき 〈論文〉漂う膜、内なる海
論文等審査委員	
（主査）	東京芸術大学 准教授 （美術学部） 小 山 穂太郎
（論文第 1 副査）	〃 〃 （ 〃 ） 布 施 英 利
（作品第 1 副査）	〃 〃 （ 〃 ） 大 西 博
（副査）	〃 教 授 （ 〃 ） 櫃 田 伸 也
（ 〃 ）	〃 〃 （ 〃 ） 坂 口 寛 敏

(論文内容の要旨)

私は作品制作の中で、海や波の動きを凝視したり、人の顔や皮膚に近づいたりしている。私はそれらの動きの内に、目には見えない薄い膜の存在を感じている。この膜を通して、遠くにある巨大な何かを感じている。この見えない膜には、意識や感情のようなものが漂っているのではないかと想像している。私には海の近くで育ったという子供の頃の経験がある。海が存在というものが創作の中で重要なものとして常に根底にある。この論文では、海を身近に過ごしてきた私自身の体験と観察を通して、人の存在の内部や表面を取り囲み漂い続ける膜のようなものについて思考を巡らせる。またそこには何が流れているのか、その奥に潜む巨大な存在に触れながら考察する。

第一章「海辺にて」では、海辺で育った自分自身の経験のなかで見てきた海が存在について語ることから始める。

私はよく近所の海辺へ通い、小さな波打ち際で過ごすことが多かった。いつの頃からか、遠くに見える海が巨大な未知のものであり、想像を超えた大量の海水の塊だと感じるようになった。私は、その巨大な海がこちらに向かって押し寄せ、自分が海に呑み込まれるというような想像をするようになった。その光景は今でも瞬間的なフラッシュバックとなって押し寄せ、私の想像の中で何度も繰り返されている。私が海や他のものに抱く不安感や位置関係の不確かさは、海の奥深い部分や海の全体像を実感できずにいるということから発している。

第二章「流れる水面」では、水面の流れと人の心情の流れの関係を見つめ、感情の揺れ動きとはどのようなものかを考察する。

海岸へ行くと、波打ち際にはゆっくりと波が押し寄せ、またゆっくりと返っていく。砂には波の痕跡としての筋が残るが、すぐに来る次の波にかき消され、またその波の筋が残る。筋は重なり、消え、さらにその上に重なり、止まることなく幾度も重なり続けていく。波の痕跡は常に更新され続けている。私の経験も同じではないだろうか。私と誰かとの対話も、かき消されながらも重なり、更新され続けるのではないだろうか。

海水や水の流れは、止まることなく常に流れて揺れ動き流れている。それと同じように、人の心の中にも止まることのない流れがある。この流れとはどのようなものか、そして流れのある場所とは一体ど

こころかと考える。人の心の表面にある、目に見えない感覚帯のような、膜の存在に、注目する。私は水面を観察しながら、その水の揺れ動きに同調したり、共鳴したりするような体験をしている。これは例えば、波の動きが激しい場合には私の心の波も波立たされ、かき乱され、波が穏やかな状態を見ている場合は、私の中に柔らかく細かい静かな波が流れ込んでくるというようなものである。そしてこのような体験を通して私は、日常生活のなかでの人との対話のなかでも、同じようなものを感じるようになった。水面を観察している時の自分と水面の関係が、自分と対話する相手との間にも生じること、そして、人の心の表面にある膜状の揺れと共通していることを示す。

第三章「現象と心」では、人の顔や皮膚表面を観察する中で私が執着するようになった、みえない膜について、思考を巡らせる。例えば、感受性の膜と、意識の宿る場所としての皮膚について、考察する。

顔の表情もひとつの膜である。顔の表面には、薄く貼り巡らされた水面が漂っている。人と対話する中で、相手の顔に貼り付いたその薄い膜の隙間から時々、瞬間的に歪んだ表情を見る時がある。この、表情と表情の隙間にある割れ目か裂け目のような一瞬の表情を、意識の抜け穴のようなもののよう感じている。ある人にとって衝撃的な一瞬の表情は、記憶の中で何度も思考が繰り返され、それは更新されながら永遠とも言える長い時間に引き延ばされる。

人との対話は、相手と自分が呼応し共鳴しながら作り上げていく共同作業である。目の前にいる他者の顔には私が映り込み、私の顔にも他者が映り込んでいる。お互いへの反応と応答が、お互いの顔に現れている。その表情の現出によって相手の態度は刻々と変わっていくだろう。心や意識はいったいどこにあるのだろうか。私は、皮膚そのものが意識を持っているかのように感じることもある。感受性の最も先端に位置しているのは皮膚表面である。人が何かを感じたり考えたりする時、それを最初に感じるのは、触覚の張り巡らされたこの皮膚そのものなのではないだろうか。皮膚に隙間なく張り巡らされた感受性の膜は、波打ち際に揺れる波のように身体の表面を出たり入ったりしながら揺れ動いているのではないだろうかと考えている。

第四章「内なる海」では、これまで論じてきたみえない膜というものの向こう側に何があるのかについて、思いを馳せる。

私は顔という膜を通して、相手に映り込んだ、自分自身の心の奥底にある自分でも理解できない恐ろしい何かを、見ているのかもしれない。私は波打ち際から海の奥を見て、恐ろしく巨大な真っ黒い闇の怪物のようなものを想像する。私はそこに漠然とした不安と恐怖を感じている。ここには、人が誰でも持っている、存在している事への不確定さがあるのではないだろうか。これは人の心の奥底に見え隠れする巨大な海であり、深海の底にある暗闇のようなものである。

波打ち際と水面を丹念に観察していくことで、そこに小さく波立つみえない膜と、その奥にある深海の沈黙を見ていきたい。きっかけは海が存在であった。海の身近にして育った私の中には海が沁み入っている。実際に海の前に立たなくとも、私の中には海の実感が大きく広がっている。その中でも波打ち際は、私にとっていつまでも変わらぬ創作の起点の場所であり、恐ろしくも美しい場所であり、すべての始まりの場所である。

(博士論文審査結果の要旨)

この論文は、海と向き合った体験から始まって、筆者が自身の作品として、海を「内面化」していく思索の記録である。

「Ⅰ 海辺にて」では、海の水のリアリティや、水面の「膜」としての特性を、海辺で育った体験や、海辺で行ったパフォーマンスなどを交えて綴られる。

「Ⅱ 流れる水面」では、波をモチーフにしたドローイングや映像作品を通して、その「膜」性を浮かび上がらせ、さらには身体の皮膚という膜へのアナロジーにも言及がされる。

「Ⅲ 現象と心」では、膜への考察はさらに深化、新展開をみせ、意識の宿る場所として皮膚というような、単なる物質としての膜ではない、精神との関わりで論考が続き、またその具体的な表現としての作品が提示される。

「Ⅳ 内なる海」では、ここまで論じてきた膜から、さらに膜の向こう側の世界へと突き抜け、膜の向こうにある暗く奥深い世界へと思いを馳せる。そして「向こう側」が提示されることによって、再び、その手前にある膜の世界が浮かび上がり、筆者が考える膜という世界観を語ることが完結する。

筆者は、ドローイングや映像作品によって、海や皮膚という膜のモチーフを作品にしている。この論文では、そのような制作が、どのような世界観や美意識から生まれ、創られてくるかが検証される。

筆者が、美術作品の制作を通してつかんだ世界のありようを、ここでは論文という形でまとめ上げているが、それは今後の作品制作に資することも大きく、また筆者の作品への、我々鑑賞者に対しても、より深い見方を誘うことになる。

以上の理由で、この論文には大きな意義があり、東京藝術大学大学院美術研究科の博士論文として高く評価できる。よって、本論文を合格としたい。

（作品審査結果の要旨）

海と対峙すること、表現を模索することを同位置にとらえた町野の表現は、海面をとおして現われる表層や膜を、「膜としての皮膚」「膜としての水面」「膜としての布」「膜としての絵画」に置換し、その変化を追い求め続けることで表現を展開してきた。町野は、作品をとおして海を模索するが、海への内側に入ろうとする行為は意識的にとっていない。彼女は、ひたすら海の表層で留まっている。博士作品においては、作品そのものが膜に変容することで、海の表層に留まる表現者のスタンスを確保している。

一見、憧れや身近な海の存在を知ることから始まった海へのアプローチは、表現の中において徐々に恐れや不安の感情に変わっていく。「命を吐き出すかのような祖母の表情」「海に入水する」「厳冬期の浜辺で肌着でたたずむ」行為をとおして、死と隣接した生を作品のテーマに据えている。これらのアプローチにおいて、生を形成し生を取り巻く環境としての“内なる海”の存在を明瞭に提示したうえで、彼女にとって海の内側に入ることは、他と同化することに繋がることを暗示している。また、この同化は、自己存在の放棄に繋がり、自己の存在を消滅させることを物語っている。

彼女の表現における内なる海の存在は、命をもつ全てのものを成り立たせていることとして定義されている。家族とも、隣人とも、映像でしか知らない女優とも、内なる海によって一体化されている。また、彼女の表現全体に共有する不安や恐怖は、この海の内側を覗こうとした時、またその中に入ろうとしたとき感じる感覚である以上に、生を持つものの入り込めない境界の存在を暗示している。

絵画から映像、インスタレーションに展開する博士作品において、「生きるために表層を漂う、すべてと存在するために内側を思う」ことを表現として表出し、海をとおして成立する表現の世界観および現実感の獲得が町野個人の生に対するリアリティーを明瞭に提示すると共に、社会と共有する課題として、生の現実性における課題を提示していることは博士としての評価に値するものである。

（総合審査結果の要旨）

町野の論考は、自らの幼少期から育った海辺での体験、海から感受したものから始まっている。海辺

にあるもの、漂流物、波音、天候や空気の震え等々、諸々すべてが、町野の作品制作の起点を作っている。町野自身が海をよりどころに自分自身を探りながら、同時に自分を取りまく世界・他者との関係を受けとめているのである。

海辺に佇み白いレースで顔を覆った自分自身を写し取った作品は町野の原点とも言える独自の姿がある。同時に提示された短い文章には、架空の出来事として、津波に襲われることを希求する思いが語られていて、海への奥深い憧憬と恐怖が文章に編み込まれている。人は意識のなかで生と死をくり返し経験する。永遠と続くかのようなそのくり返しを、海の波の上に、垣間見る不可思議な表情を浮かべる人の顔の上に、町野は探っているのである。

祖母の死を前にして、故人の「入棺」の儀式を体験した時の挿話には凝縮された時間がある、そこでの経験がその後の時間のなかでもさらに繰り返され更新され続けて行くことが記述されている。私たちの“感情の器”が遅れて起こる想起を通して自身の経験を受けとめていることなど、生の営みへの考察が丁寧になされている。

“漂う膜”とはなにか、町野が言う“見えない膜”とは海の海面から、人の顔の表情から、立ち止まった足下の床面から、何かが震え、見えている表層のすべてを指している。その上で成されるひたすら波の律動を刻むかのようなドローイングの行為は、果てのない広がりを感じさせる。「海に吞まれる」というドローイングで示された海を吐く姿は、そのまま海に覆われていく姿を想像させる。町野は以下の鷺田清一の文章を引用することで、そこにある関係性を伝えている。「わたしの存在と他者の存在は、こうしていつもとともに同じ一つの現在のうちに係留され、その＜共同の現在＞においてたがいに噛み合い、交差し、シンクロナイズしあっている。」ドローイングや写真の上で行われていることは、揺れ動いている神経の記述であり、海や他者の表情に同調しようとする神経の震えなのかもしれない。

町野の作品「静けさと低いささやき」は展示会場の中央目前に張られ、その下部の襞をそのままに垂らされた布の上に投影されている映像作品である。生まれ育った富山の海岸から望む、海の波や、波打つ広い海原に雪が降っている風景が、モノトーンの柔らかな調子で、波の繰り返す音とともに映し出されている。波間に入り込む人の姿、口元がクローズアップされた顔の映像が波の振幅と同期しながら挿入されている。映像は穏やかなリズムで淡々と繰り返される。病で苦しむ人の口元の微妙なゆがみ、一瞬見える痛みや苦しみ、それは波のリズムのなかで浮かんで消えるのである。

ドローイングと写真から始まり、映像のインスタレーションで展開された作品は、生と死の営みを想起させるなかで世界＝他者との同期（シンクロナイズ）の試みでもある。自身の体験から記述された論文と独自の試みを持った作品は博士学位にふさわしいものとして高く評価する。